ARCHITECT

Japan Institute of Architects

1989 11 — NOV

CONTENTS

●都市デザインセミナーが近づいてきた
●第6回設計競技「幻想都市の幻覚のいえ」入選作品
●日・米の建築家が固い握手
●三高駅西地区再開発公募に要望書を提出
●「眉山ホール」取り壊しに要望書を提出

JIA 社団法人新日本建築家協会東海支部愛知部会

No.14

ARCHITECT
89.11. NOV

CONTENTS
目次

Essay
会員ずいひつ・タイル ―― 2
森　壽千・梅木　輝七・外山　重利・竹田　浩教

都市デザインセミナーが近づいてきた ―― 12

第6回設計競技「幻想都市の幻覚のいえ」入選作品 ―― 5

日・米の建築家が固い握手――ＪＩＡとＡＩＡの職能に関する協定―― ―― 14

三高駅西地区再開発公募（高浜市）三会で要望書を提出 ―― 16

「眉山ホール」取り壊しにＪＩＡが要望書を提出 ―― 17

Woman
21世紀は女の時代!?――「女の館」設計競技に入選した女性たち―― ―― 18

Art
いつも炉の音を聴いていたい ―― 金　憲鎬 ―― 11

私はなぜＪＩＡに入らないか
問題は組織の人間のつくり方 ―― 長田　雅弘 ―― 22

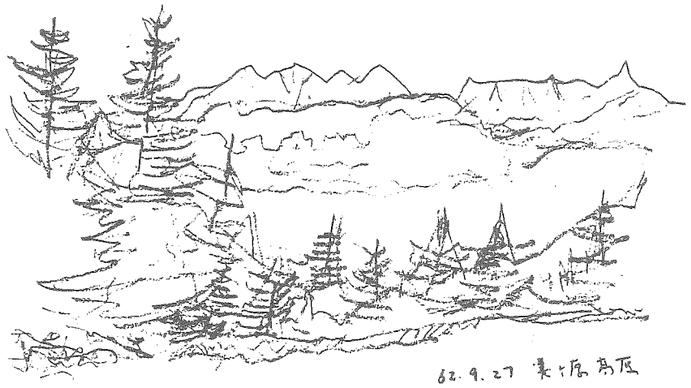
News
賛助会員の製品紹介 ―― ㈱鈴木製作所・シンコール㈱ ―― 23

Book
新刊案内 ―― 24

表紙デザイン　カミムラショウサク（E. D. LABO）
カット　栢本良三

会員ずいひつ

タイル

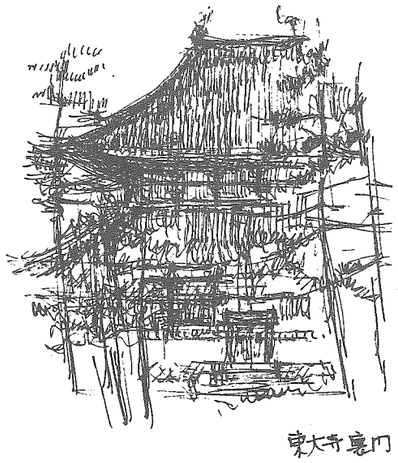


タイル雑感

森　　壽千

やきものと建築とのかかわりは意外と古く、遠く紀元前3000年も前にさかのぼるともいわれている。あの旧約聖書の創世記に記されているバベルの塔の物語は、シナル地方に定住した人々の『さあ、れんがを造ってよく焼こう。』の言葉に始まっている。石材の少ないメソポタミアでは、日干しれんがから始まって、後に発明された焼成れんがが主要な建築材料として用いられたのである。

やがて美しい釉薬の装飾れんがを造るようになり、さらに壁や床の表面仕上げには、タイルが使用されるようになった。しかし、文明開化とともにわが国に入ってきたはずのタイルが、日本で実際生産されたのは、明治30年代頃でその歴史は、いまだ 100年に満たない歳月しか経ていないらしい。だが、以来建物の外装や内装に、メジャー的存在で近代建築の歴史を彩ってきた建築素材である。



将来21世紀の時代になっても、街々に建築の表情ある風景一つとなってタイルのある建物が存在するだろう。

それというのも、タイルというやきものが、火の洗礼を受け、人間の計算を越えたものから生まれ、今は機械化された人工の産物でありながら、なぜか手造りの味わいを残し、やきものの質感や色合いに、人の心を放さない不思議な魅力があるからだろう。

建築の外装は、元来意図的に選択した表現のための記号であるが、外装材は時代とともに大きな流れを形づくっている。少なくとも過去においては、建築物の時代の刻印であり、時代を象徴するエレメントであった。

最近の外装材は、自然への表現の傾向をもつものと、人工化への傾向を表現するものと、分極化しつつその材料は、二極化の方向を辿っているように思う。

自然化の傾向は、木材・タイル・石など素材そのものを表現していこうとするものである。その素材の一つがタイルであり、私自身自然化傾向を、大切にしたいと思う一人である。

一方社会的現象として、他の分野でもそうであるが、多様化現象は、タイルの世界でも例外ではない。だが、私は建築家の一人として、こうした多様化現象に惑わされず、やきものの真の良さを、再認識しながらメタリックでドライ化傾向の多い現状のなかで、タイルを十分生かした、豊潤で表情豊かな建物に愛着を抱きつつ、潤いのある建物を造ることを、ライフワークとしていきたいと思っている。（㈱日本総合建築事務所名古屋支所長）

旧制四高の赤いレンガ

梅木　輝七

私の出身地金沢の兼六園の周辺には旧制四高、金沢美大校舎など赤いレンガの建物が数多く残っている。それらはたいてい明治から大正の初期に建てられたものであろう。子供の頃はよく赤レンガの建物を水彩で写生しながら、友達と絵の中のレンガの色を互いに見くらべて、批評しあった記憶がある。その後兼六園の周辺も都市開発事業で現代建築にとって変わったが、現在も博物館として現存している。その風格の深い色調はいつまで眺めていても見あきることがない。やはりその主材である赤レンガが見事であるせいであろう。

今日建築やその素材も多様に変容していく中で、本格的な煉瓦を望むすべもないが、やはり建築にたしかな手ごたえのある素材が求められる。その素材の一つはやはりタイルであろう。その肌合や質感は何かやすらぎを感じるとともに様々な表情をみせてくれる。

一口にタイルといってもその形状・色合は実に複雑で多様だ。無釉の土ものタイルの素朴な肌合、窯変タイルの幅広い色調の変化、鉄砂タイルの黒ずんだ赤の渋い味、ラスタータイルのメタリックな光沢など、原料である様々な土の成分や、上釉の有無、焼成温度の複雑な条件が実に様々なタイルを造り出す。

中でも特に使ってみたいと常々考えているのは、冴えた色調のはつり面のある大型割肌のタイルである。そしてそれらが大きな面を構成する時、微妙な自然の濃淡が味わい深い質感をたたえた壁となり、長い年月とともに次第に周りと調和しつつ深い味わいを増すものであってほしい。タイルについて思いめぐらせばそんな感慨が頭をよぎる。昨今の薄手のタイルや目地は、少し上品できれいすぎるきらいがないでもない。仕上げる方からいえば完璧なものを造ろうとするのであろうが、目地もあまりにも真直ぐ通り過ぎるので文句のつけようがないほど、綺麗に納まってしまう。

タイル張りの建物は確かに多くなった。そしてまちは美しく彩られてきた。しかし、何となく変わったタイルを張っておこうといった薄っぺらな、奇をてらっただけの建築を見かけるたびに、子供の頃出合った金沢のまちの力強くて、風格のある表情の建築が心に甦ってくる。

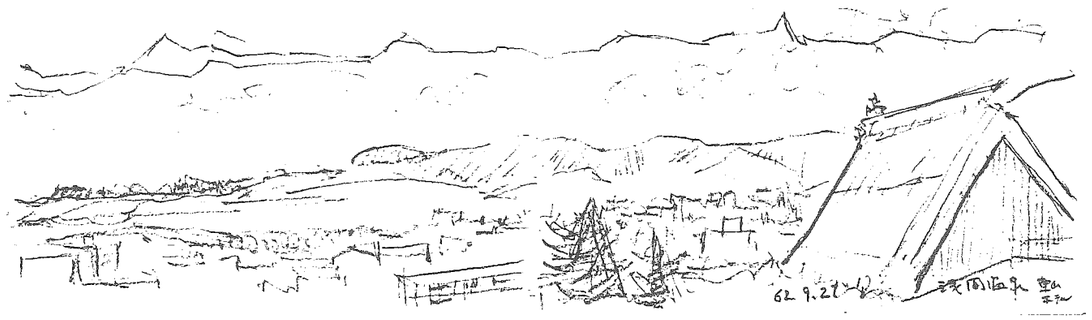
（㈱鈴木隆二設計事務所次長）

壁面、光と影

外山　重利

今年の夏は暑く長かったような気がする。僕は何を思い出しているのだろうか。あの夏の日を受けたタイルの壁面のまぶしいかがやきと、今、秋の日ざしにどっぷりつかったこのタイルの壁面を無意識に比べている。

壁面、君が良く似合うのはきっとこのタイルの壁面だ。窓のない西側のまっすぐな壁面で高さは 3.5mくらいある。床はコンクリートの洗い出しになっていて、壁面から３ｍくらいの間隔をとって緑の木立が並んでいる。けやきの木だろうか。



カット　栢本良三

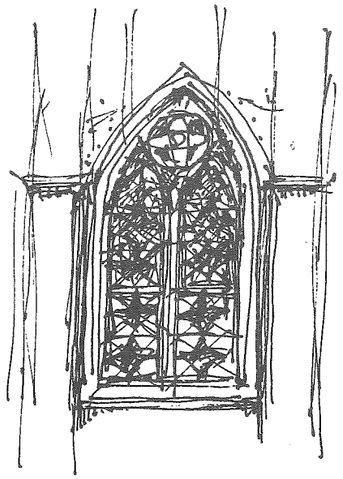
僕は壁面を見つめている。日が西にかたむき始めてけやきの木の影が壁面を犯し始めた。

なぜか再び僕がこの壁の前にいるのだ。あの夏の日にほんの一瞬だけこの壁面に立つ君の姿を見ただけなのに……あの時の壁面とは明らかに表情を変えていた。それは炻器質のタイルで二丁掛と小口タイルとを交互に貼ったフランス貼のタイルの壁面、下地はコンクリートだろう。なぜあの夏の日君がここにいたのだろうか。思い出せない。でもどうしようもなくこの壁面に愛着を感じる。いま秋の日を浴びていっそうつのるのだ。それは壁のむこうが何であるか全く僕に問いかけなかった。来年の夏もこの壁面に会いたい。そしてこの壁の冬の顔も春の顔も見てみたい。

しかし、僕は自分自身におそれているのだ。こんなに偶然に三度(みたび)この壁に会えるだろうか。自己の怠慢と忘却のために

しかし、僕は自分自身におそれているのだ。こんなに偶然に三度(みたび)この壁に会えるだろうか。自己の怠慢と忘却のためにもう会えないのではないだろうか。たとえ会えたとしても僕もこのタイルの壁面も変わっていないだろうか。

（外山建築設計事務所主宰）



レンガのイメージ

竹田　浩教

建築と焼物（セラミックスも含む）について随筆を依頼され、改めて日頃外壁や内壁に使用している、この素材について考えさせられる機会であった。

以前、瑞穂区内に建築する住宅の設計を依頼され、外壁をレンガとコンクリート打放しでまとめたいと思い、以前ヨーロッパ旅行をした時、イタリアの小さな町で、バスの車窓から見たレンガ積みの住宅の、まるで西陣織を見るようなイメージに、感動したことを思い出しました。あのイメージが日本で再現できないかと思い、いろいろカタログや資料を取りよせ、メーカーの人にも聞きましたが、現在日本では作られていないことがわかりました。しかたがないので、ＰＳレンガという、ヨウカン状の中央に穴があいていて、鉄筋を通して、コンクリートのく体からアンカーを取り、一段一段積み上げていくレンガを使用したことがあります。結果、重量感は出ましたが、（竣工写真を見ながら）あの西陣織のイメージには、程遠かったような記憶があります。

レンガは、コンクリート、石材、木材とならんで、耐久性もよく、自然素材であるから年月とともに、風雪に耐え、情趣豊かに、時には風土、自然と荒々しく対峙し、時にはひっそりと、自然とともに溶け合う、非常に不思議な素材であると思います。

日本の文化は切捨の文化といいますが、この世界最古の建材といわれるレンガの良さを、もう一度原点に立って、考えてみたいと思います。あの私のイメージにある、西陣織を夢みて。

（註）　最近この自然素材の良さが認められ、通産省の新住宅プロジェクトの一環である「レンガ利用高耐久性部材の調査研究」の成果報告書の中で、かなり深く追究されています。　（槙設計室主宰）

第6回設計競技

「幻想都市の幻覚のいえ」

入選作品

＜趣旨＞

“坪一億円”という現象が、いかにひとの心を蝕んだか。社会の持つ健全な「平衡感覚」を喪失させたか。この人心の荒廃した状況の中で、いえを真面目に考えようとすることの、むなしさを痛感する。

そうした中で、現実の都市は巨大資本のデーモンのごとき、一見きらびやかな金属の箱で埋め尽くされ、浮き草のような消費文明だけが、あだ花を咲かせている。都市に住むことの意味と、目の前の現象とのギャップに、多くの人びとは立ちすくむだけである。

今秋、㈳新日本建築家協会は名古屋市との共催で国際的な都市デザイン・セミナーを「21世紀の都市デザインを問う」という統一テーマで、名古屋市を舞台に開催することとなった。

そこでは、都市という概念が実は、人の頭の中にしか存在しなくなる、現実のフィジカルな都市は、ある時間での幻影か、過去の形骸にしかすぎない……といった、来世紀を見据えた都市と人間の論議が展開されるはずである。

この設計競技も、今回でその10年シリーズの６回目を迎える。“すまいのソーシャル・プランニングをさぐる”という企画コンセプトは変わらないのだが上記のような背景を踏まえ、ややパラドキシカルなテーマ設定で実施することとなった。

入　賞　者

【学生の部】

金　賞

由田　　徹（豊橋技術科学大学大学院）

水野　安彦（愛知県立芸術大学大学院）

銀　賞

和田　泰充（愛知工業大学）

巒　　勝（豊橋技術科学大学大学院）

長田　直之・岩上　和男（福井大学）

榎並　　靖（愛知工業大学大学院）

近藤　由美（名城大学）

佳　作

山崎　幸雄（名城大学）

幅　　康宏（中部大学大学院）

筏　　真司（福井大学）

藤谷　智史（金沢工業大学）

中村　武司（名城大学）

日置　武人・日置　優子（豊橋技術科学大学大学院）

鵜飼　昭年（愛知工業大学）

努力賞

武藤　　省（名城大学）

酒井　武志（名城大学）

【一般の部】

金　賞

該当者なし

銀　賞

畑　　直樹（東京都南多摩新都市開発本部）

奥村　常司（アールアンドエス設計工房）

熊沢　滋孝（熊沢建築事務所）

佳　作

木寅　篤人（ミサワホーム木質設計一部）

熊倉　和男（木曽高等学校）

半谷　　任（神谷義夫建築設計事務所）

久保田英之（中建築設計事務所）

（敬称略）

※応募点数：学生の部40点・一般の部22点

審査委員

審査委員長　佐久間達二

審査委員　渡辺　武信　広瀬　一良　五十嵐　昇　中島　一　梶田　英夫　神谷　義夫　牛山　勉　稲石　嘉郎

審査経過

第６回設計競技「幻想都市の幻覚のいえ」は、平成元年９月16日に応募が締め切られ、応募点数は学生の部40点、一般の部22点で審査が行われた。審査は９月23日、24日の両日にわたり、23日午後２時より設計競技特別委員会栢本良三委員長の開会の挨拶により始まり、審査委員長に佐久間達二委員を選出し、ゲスト審査委員に渡辺武信先生をお迎えして９名の審査委員により審査に入った。

まず審査方法を協議し、第１次、第２次の２段階審査とすることとし、第１次審査は○×方式により応募点数を半数にしぼることを目安として積極的に取り上げて２次審査の対象とするものを○、×を落選とし○の少ない順に一作品ずつ推薦した審査委員の意見を聞きながら慎重に協議を行いふるいにかけ、学生の部25点、一般の部12点が第２次審査に残ることになった。

第２次審査は、10点法により合計点数の多い順位に従って協議し、入賞作品を選出することになったが、審査委員会での激しい議論の末、順位が入れ替わったり下位でも特質のある作品を再度討議の場に取り上げるなど、慎重に審査が行われその結果、学生の部に金賞２点、銀賞５点、佳作７点、努力賞２点が選ばれ、一般の部は金賞に該当作品がなく、銀賞２点、佳作４点が選ばれることになった。

審査は時に紛糾したが、午後10時30分入賞各点を決定し、翌24日これらを再確認し、講評のまとめを行い無事終了した。

審査総評

審査委員長　佐久間達二

ＪＩＡ東海北陸支部は今度北陸支部の独立が実現し、㈳ＪＩＡ東海支部・北陸支部となりこの第６回設計競技から北陸支部ができたが、この競技に関しては従来通り参加して頂き、学生の部で４点の応募があった。東海支部の応募案と一緒に審査され、銀賞１、佳作２という成績であったことをご報告する。

第６回のテーマである『幻想都市の幻覚のいえ』はやや内容のとりつきにくさにも拘わらず「学生の部」40点、「一般の部」22点と僅かではあるが昨年を上廻り一同ホッとした所である。また、応募作品の内容もいずれも作者の全力投球のあとがうかがえ嬉しかった。ただこうしたテーマの性格上か「一般の部」に金賞該当が無くて学生の部へ廻ったことと、学生の部で特に模型が優れていた２点に努力賞を与えることが合意された。

このことは、私だけのことですが審査に戸惑いを感じた。今まで私が経験してきた審査は大てい応募案を見て、要綱に盛られた機能の質を審査によって評価するというのが普通であった。しかしこの第６回を数えるシリーズであるこのコンペのテーマは、評価の対象がメンタルな要素に移行していることは応募する方々にも理解されていると思う。そして今回のテーマである“幻”そしてそれに対して応募者数が増しているということは素晴しい。

また提出された案もそれぞれに思考し抜いた力が伝わってくる。一見しての稚拙さの陰にかくれた珠玉のように輝くコンセプトを見出し得なかった点が多くあるように思えてならない。その意味で、ゲスト審査員としてご参加頂いた渡辺武信氏に心から感謝している。審査のプロセスで審査員と一緒になってご議論を頂きよい方向性をお示し頂いたことも委員一同に代わって厚くお礼申し上げる。

審査講評

ゲスト審査委員　渡辺　武信

これは、幻の質を問う競技であった。幻にひとり心を遊ばせることはやさしい。しかし、人の心に訴えるような幻影を描き出すことは必ずしも容易ではない。

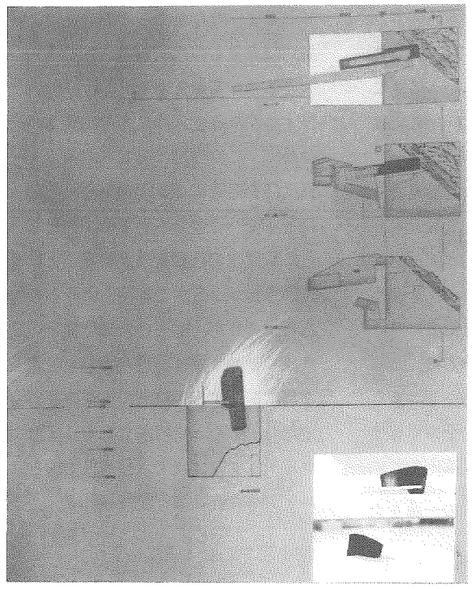
そこには、現代の都市に否定的に対するか肯定的に対するかという二つの選択があるが、否定的な方向には現状に背を向けた逃避に陥り易く、肯定的な方向には幻としての飛躍に欠けた現状追認に陥る危険がある。

応募作には、否定的方向が目立ち、それらの多くは地下への潜入、厚い壁による遮断、塔上への隔離などの手段で私性を護る、という類型化が見られた。それは現代都市の病患を示す症候としては興味深く見られるが、作品としては自閉的な逃避衝動の表明に終わるもの多かった。逃避がいけないというのではないが、類型的イメージの提示だけでは実りはない。人の心に訴えるためには逃避を徹底させると共に、造型的洗練と表現の工夫によって、それを一つの批評にまで高める必要がある。学生の部金賞二作が他を抜きでたのはこの点にある。一方銀賞の近藤さんのように、表現は幼くても小さな私的幻想を大切に培養して行くのも類型を避ける好ましい方向として注目される。

一方、肯定的アプローチは現状からすればより困難な選択で、多くのプロっぽい手慣れた作品が今回のテーマの求める批評性の欠如ゆえに落とされた。その中で一般の部の熊沢氏は幻というよりも論理構成の確かさで賞を得たものだ。また肯定が現状追認に陥る危険から巧みに身をかわし、アイロニーやパラドックスで点を稼いだもの（一般の部の畑氏、学生の部の榎並氏）も目立ち、ここにも正面から幻影を描くことを許さない現代都市の酷薄さが現われている。

冒頭に記したように、このテーマは表面的には取り組み易いが、作品として結実させるのは難しい。それゆえに目ざましい成果こそなかったが、入賞作、佳作に見られる真摯な追求と多様性は、審査過程を楽しみつつ、貴重な刺激を受けた。

学生の部　金賞　　由田　　徹（豊橋技術科学大学大学院）



今日、都市、建築を論ずる場合に、人類文明はいずこに向かっているのかという根源的な問いかけを避けることはできない。今や都市という概念が人の頭の中にしか存在しない幻影かも知れないとの不安は多くの応募者の共感を呼んだようである。

金賞一席に選ばれたこの作品の他にも優秀な作品が多くあり選考では紛糾したのであるが、何といってもこの作品がテーマに真正面から取り組み、しっかりしたコンセプトの上に作品を組み立てているところに強さがあった。

コンセプトがよくても「かたち」にならなかったり、「かたち」がよくてもコンセプトが弱いという作品が多い中で、この作品にはしっかりした哲学があり、造型力もプレゼンテーションもなかなかのものであった。

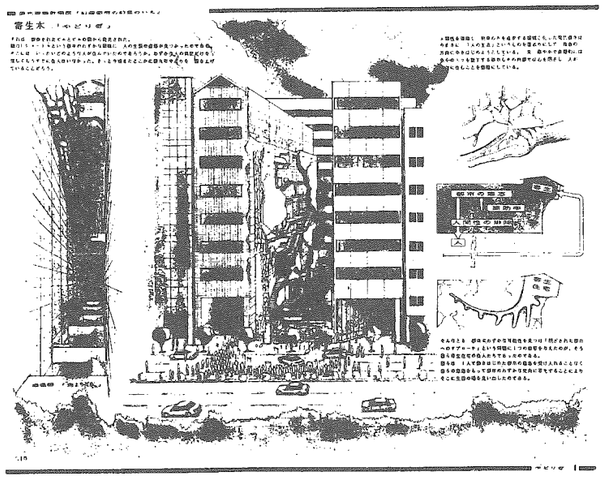
最初作品を見た時に「2001年宇宙の旅」の映画とイメージが重なったが、地面に喰い込んだかたちの黒い物体はあたかも過去から未来へのメッセージを伝える「モノリス」の如く「不思議さ」と「神秘性」を感じさせた。

私達は、日頃の設計活動の中で極めて単純な造型で人々に感動を与えることの困難さを痛感しているだけに、この作品の単純明快さの中の秀れた造型力、演出力（例えば街並みの中に突如抜けた空間、間口から奥に導く白いナイフの様な導入ブリッジ、突然の陥没口と地球のはらわたを思わせる露岩、黒い量塊の微妙なカーブと傾き）を感ずるのである。

我々地球人のペシミスティックな未来が、スペースノマドであるとの予感をこの作品は象徴しているように思われる。

（梶田　英夫）

学生の部　金賞　　水野　安彦（愛知県立芸術大学大学院）



この作品は、他の多くの応募作のように「自分がこう住みたい」という私的な幻想ではなく、現代都市を舞台に壮大な虚構を組上げたという点できわめてユニークであった。

作者はあきらかに、1.5メートル巾の空間に人が住むことを否定も肯定もしていない。ただ、人はこのようにも住み得るという極限的環境を構想し、それを現代都市の具体的な状況と結びつけてヴィヴィッドに視覚化して見せたのである。

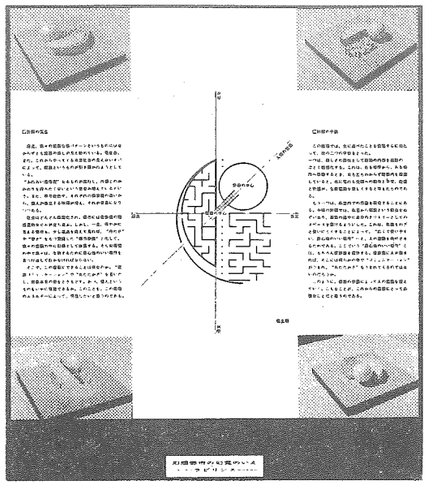
この作品に接する人々は、この住居の異様さに驚いたり笑ったりしながら、なおよく見ると、それらが暮らしの基本条件を一応満たしている屈折したリアリティに注目し、そこから住まいというもの、都市というものについての自分の常識がゆらぐ思いを味わうのではないか。

その効果をさらに高めているのは、作者の表現技術の確かさと、「それは解体されたビルとビルの間から発見された」と開幕するストーリー・テリングの巧みさ、物語的想像力である。

総じてこれはきわめて意地の悪い、毒のある幻影であるが、それを批評性に実らせた作者の力量と、社会に対する衝撃力を考えれば、疑いもなく金賞の一つに値する。

（渡辺　武信）

学生の部　銀賞　　和田　泰充（愛知工業大学）

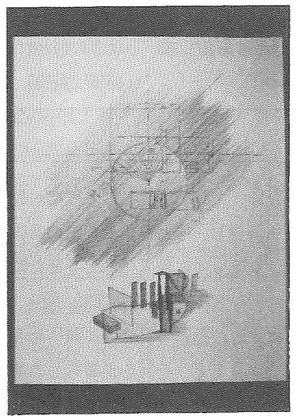


21世紀に向けて私どもはいったい“どこに住むべきか”“どんな住まいをもつべきか”がいろいろ議論されている。そこには、”ゆとり”“あそび”という言葉に象徴されるように、そこには住まい方の原点をめざすソフトにむけてこの志向が高まっているのである。もっとも、私どもの家族生活パターンは、多少の変動の兆しが見え始めてきたものの、近未来に向けての家族のくらし方は、たしかな足どりで変わりつつある。いっぽう、私どもをめぐる社会は、ますます組織化され、都市の形態も、機能追求への一途をたどろうとしている。

このようななかで、この作品は、“建築にできるものは何なのか”を問いかけ、家族本来の姿をとりもどし、“個人”の再生への試みを求めたものである。そのために、この作品は美しさの演出――内部空間を迷路により回遊をもたらし、期待と不安への楽しさを求めようとし、さらに私室内の行動を限定することにより、人の意識への収斂を期待しようとの解である。これを、過去と未来の軸と人間の意識の軸の交差に困惑の中心を設定し、これに逃避する軸線上に快楽の中心をおいたレイアウトは明解である。またファサードもシンプルで、見事な形態をクリエートした腕は高く評価される。

（中島　一）

学生の部　銀賞　　轡　勝（豊橋技術科学大学大学院）



この作品はコンクリートの箱の中に自分が閉じこもって出来る限り外と隔絶して、自らが描く幻想世界に陶酔して、やすらぎを求めようとしている。

この家のアプローチは、階段で昇り、ブリッヂを渡り、階段を降りて玄関へ到達するのであるが、堅固な周壁の中で「生きてきた証の墓」とは何を言いたいのか判然としないが、図面から察するに、自己の一種のモニュメントを建てこれと対峙することのようである。そして自らの手により奇跡が生まれることを信じつづけるとしているが、何を期待してのことなのか筆者にはとらえ切れなかった。が底に流れる自分の世界を具現化させる手段としてのこの作品は共感を呼ぶ魅力があった。それは人の生きざまの原点の一つを表現してみたかったのではなかろうか。

簡潔な文と、図面の中にいろいろの意味が含まれている秀作であった。

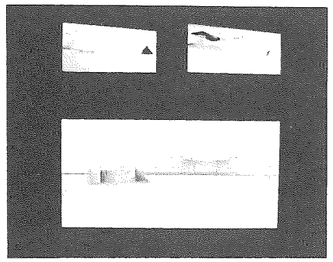
図面は肝どころをとらえた豊かな表現であり、特に立面には好感を持った。アイソメはいまひとつであったのが残念であった。すなわちこの画は全体の思想を壊しかねない表現であった。

また、黄色の小さい丸は何を表現したのか、深い意味がありそうだがつかみきれなかった。

発想の豊かさと洗練された表現力は非凡な才能であろう。将来を大きく期待したい。

（五十嵐　昇）

学生の部　銀賞　　長田　直之・岩上　和男（福井大学）



数多くの夢が現実と相対したとき、幻と化すのが、また現実でもある。

いくつかが幻となれば、新たな夢を見つけ出す。夢を実現させようと知恵をはたらかせ、努力を重ねるのは、「死」と対するのではなく、「生」と対するのであろう。

ただ、資本の荒波は容赦なく我々を襲ってくる。それには無力さを嘆くのみである。

いや、もしかすると建築を造る仕事などというものはそれに加担しているのかもしれない。

都市に住む、ということの抱えている問題は大きいのであるが、少ない言葉と単純なプランで答えた案である。

「死と対しながら……」をシンボリックに基として表現しているところがポイントなのだろう。

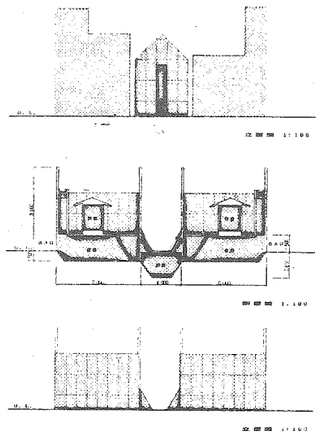
バランスのよい表現に好感を持つのだが、もう少しコンセプトをつめてプランにも表現して欲しかった。何かあるだろうことを期待させるところがテクニックではつまらない。

一次、二次と審査を行っていく過程で審査委員の合計点が高いものでも、最後の討議で下位に落ちる作品がある中で、さして議論もされないまま残って銀賞となった。

やわらかな感性が受け入れられた結果をふまえ、これからの活躍を期待したい。

（稲石　嘉郎）

学生の部　銀賞　　榎並　靖（愛知工業大学大学院）



自然の生命体のうち人間のみ（特に文明人の場合）自然界との間にすき間が存在し、それが人間の自閉性を生み出しており、その対応として疑似現実、つまり幻想の世界を創造して、その中で生活するという考えである。

この疑似現実＝幻想とのコンセプトがユニークで面白い。

都市の空間の中に屋根のない切妻型の囲いを造りその中に更に切妻の建物を入れるという、いわゆるダブルウォールの思想で、厨房、浴室、便所などと廊下（回廊という表現はおかしい）を地下におさめ、直交軸に完全にシンメトリーな形態は、一見神殿の如き不思議な雰囲気をかもし出している。

幻想の都市と「いえ」とのギャップを埋める一つの方法として、この対の箱の可能性は否定出来ないが、打放し壁面（に見える）の切妻型はむしろ現代都市の中では極めて日常的で現実的であるように思われる。むしろ解答としてはもっと非日常的であいまいな「かたち」の方向での追求がなされてもよかったのではないだろうか。

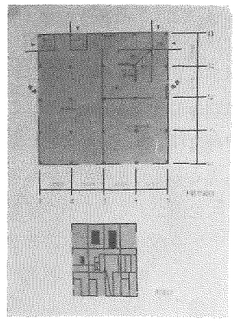
「趣旨に関する５つの考察」は問いかけとしては大いに共感を覚える所であるが、その問いかけに対する答として作品の突っ込みが多少不足しているようだ。

胎内空間や昇天の階段の思想も共感出来る所ではあるが、それを「かたち」にする部分での弱さが多少気になるところである。それになぜ「対」なのかの説明が欲しかった。

作者の思想、力量については大いに将来性を感じており一層の努力を期待している。

（梶田　英夫）

学生の部　銀賞　　近藤　由美（名城大学）



ふと吸い込まれるように作品に向かう。この作品はそうした裸の姿を、素直に示してくれたように思う。読み進むほどに、導入部の融けて行く氷のジャングルジムは、作者の消えて行く心象風景を、痛いほど私に感じさせた。他の作品が「幻想都市の幻覚のいえ」というおどろおどろしい命題の持つ意味に対して、真っ向から切り込む姿勢を見せ、それが空を切って、コンセプトと計画が肌分れしている中で、この作者はポエム、コンセプト、計画をぴったりと密着させながら、たんたんと書き進む。このような展開の仕方は、長い審査経験の中で初めてであり、それが私を引きつけた。

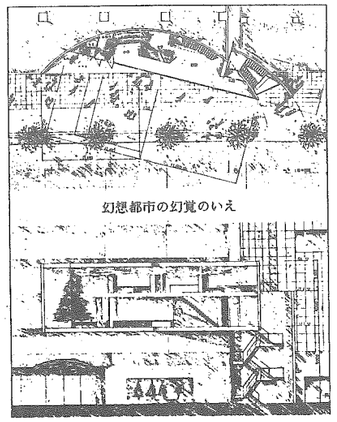
作者が恐らく女性であろうということは、審査半ばで気づいたことであり、包み込むような暖かさがそれを示している。建物は64㎡の３階であり、適当な稚拙さを装いながら、リアルに消え去った心象風景を再現して行く。１階の入り口は「父母」・「姉」・「私」用に３ケあり、何か悪いことをした時そっと出入りする心象の世界を垣間見せ、入り口は一つであるという私の固定観念を一撃する。各階に開けられた「吹抜き一穴」はそれぞれの階の気配を察し、連絡網としての適当な位置と大きさを持ち、ふっと顔を出す母や姉はジャングルジムの幻想。

なによりもこの作品には、この手のテーマでなおざりにされる“普通の生活”のプライバシィと開放感が、きっちりと守られている。作者は最後に初めて、これが私の幻想都市の幻覚のいえであると一言命題をのべて完結させ、ジャングルジムに寄せる心象の強さを、見事なパラダイムによって統一させた。

のっぴきならないような命題に対して、他の秀作の多くがパラドキシカルな言葉と、美しい形で答えたのに比べ、作者は心と心象の具現で答えた、と考えていいだろう。ノマド（心理的都市浮浪民）達の選択も、案外この辺りに落着くのかもしれない。

（広瀬　一良）

一般の部　銀賞　　畑　直樹（東京都南多摩新都市開発本部）



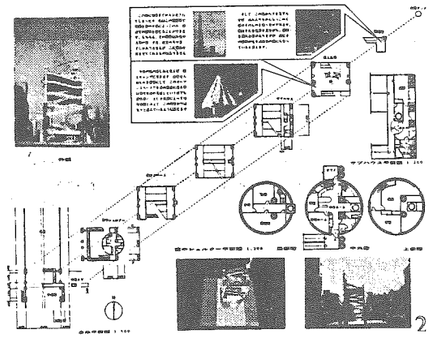
なにもむつかしいこと、言うことはない。都心部の、すさまじい物量攻勢の波の中で、ここにも、かつてはヒトや家族の生活があったはずなのだ、という追憶が、立ちはだかるビル群の虚像の中に、ふと、フレッシュな幻影を挿入した。

銀座の晴海通りだと言う。メタルばやりの巨大な無機質の大壁面の表層にすべり込ませた、都市住民の家族像……。テラスには季節に合わせた緑のシルエット これも幻影か。

巨大資本の占拠する都心域の表層に、侵入する感性的な空間ゲリラ。やってやれないことはない。作者は「けっしてマネキンではない」と強調する。

あとでわかったことだが、本人は都市開発を担当する企画官とのこと。そうした眼で、この作品を再見すると、もう一つ味わいが出て来る。　（牛山　勉）

一般の部　銀賞　　奥村　常司（アールアンドエス設計工房）



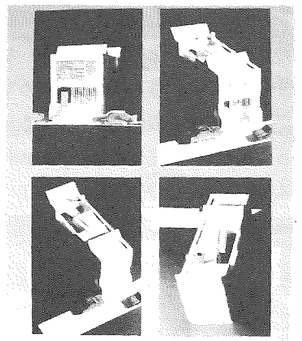
この案は、問題の多い都市にもし居住するとしたら、その住居の形はどうなるかという問いかけを図面化している。積極的に都市住居はかくあれという肯定派ではなくどうしても黙視出来ない住居が内包する不安を確実に一つ一つ技術的・行政的に解いていく過程で生れ出た球状のシェルターを住居の核としている。

日常的な騒音、排気ガスから家族生活を守るための装置で、非日常的な天災や戦災に対しての避難路が近隣区ごとに設けられた公共の地下ホールに連なり私的から都市的な防災計画と連動した施設となっている。

都市で安心して生活を享受出来るためには、こうした計画を可能とする先行投資が必要となる。

誰がそれをするか？　その時点でこの計画は幻となる。　（佐久間達二）

一般の部　銀賞　　熊沢　滋孝（熊沢建築事務所）



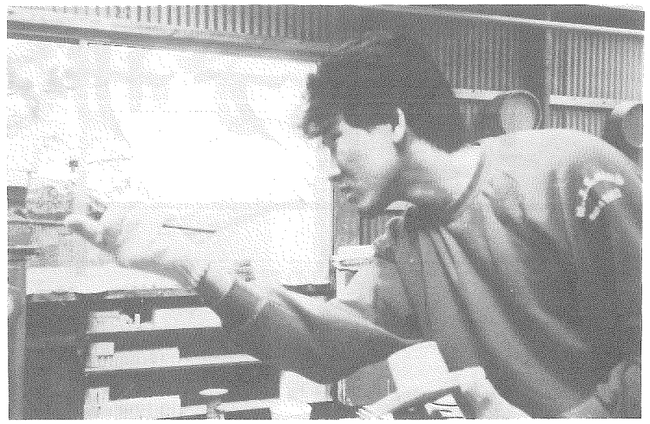
変貌し巨大化していく現状の都市で、そこで住みつづけてきた居住者にとって町のイメージはその様相が一変し、かつての居住空間はうたかたの夢と消え去ったかのようである。

しかし、なお彼らにとって都市に住まいたいという願望は捨てがたく、独自のテリトリーを見いだそうと考えるのもごく当然といえることかも知れない。

この作品は、こうした状況を見すえながら将来的なさまざまな生活パターンを分析し、「住まうとしたら何があるか」という命題に真正面から取り組んだ気概がうかがえる。作者はまず街路と住戸の接点に視点を置き、緩衝空間を設けながら、やや無表情と思える連子格子とガラスで構成された隔壁を通り抜けると、そこにはささやかではあるが中庭を囲んだまぼろしとも思える個の世界が展開していると発想したようだ。このテーマに対してコンセプトに今ひとつつっ込み不足の感はあったが、いかにも一般の部らしい堅実な作品である。

都市環境を意識した中庭型のプランニングとしては一つの定型であるが、パブリックスペースが離れなどを巧みにスキップさせながら関連させ、無難にまとめあげている点はかなりの力量と見受けられる。スケール感も確かなものがあり図面表現もけれんみがなく、好感の持てた作品であった。　（神谷　義夫）

いつも炉の音を聴いていたい



陶芸家　金（キム）　憲鎬（ホノ）

採土場のトラックしか出入しないような川沿いの泥道を、一旦は引き返したものの、やっぱりこの道しかないと思い直してたどっていった先に、金憲鎬さんの住まい兼アトリエはあった。

「コーヒー、好きですか。」はい、と答えると、じゃあ美味しいのを入れましょう、と、お気に入りの東京の店の豆を出してきて、その場で挽いてくれた。「好きな人には入れ甲斐がありますからね。」普段、自作の器を使うことはあまりないそうだが、そのとき出してくれたのは、自作のどっしりした大振りのコーヒーカップ。灰色の肌の上にピンク、クリーム色、紺色などがあしらわれ、ゆるく曲線を描く太い持ち手がついている。思ったほど重くなく、持ち心地がとてもいい。「これ、傑作でしょう。持ち手の、ちょうど中指で支える部分に指の太さの窪みがつけてあるんです。」金さんは、自作でも、まず自分でいいなぁ、とほれ込んでしまうそうだ。いとおしむ気持ちが伝わってくる。

すぐ隣にある炉の音がずっときこえている。家全体が炉に包まれているみたい。「気持ちのいい音でしょう。僕は炉の音を聴いていると安心するんです。仕事してるんだな、って気になるし。」

瀬戸市から離れたことがない、という彼。高校卒業後、１年間職業訓練専門学校に通い、最初は職人を目指した。ロクロに向かって同じものをつくり続けて２年。「あるとき、おかしい、と思ったんです。これでは僕が出ていない。自分でつくるものに自分が出ていないなら機械でつくった方がましだって。」

自分を表現するために、そして一人でも多くの人に自分の存在を知ってもらいたいと思って「ものづくり」を始めた。最初は友人と共同で、後に独立して。仕事が評価されずに、ずいぶん悩んだ時期もあった。そんな中である人が、彼の作品を絶賛してくれた。そういう人が一人でもいるのなら、その人のためにつくろう、と思った。

いまではファンも増え、遠く九州や青森からも訪ねてくる人がいるのは、嬉しい驚きだ。「僕の作品を買ってくれる人というのは、僕がこうして仕事を続け、作品をつくっていくことを奨励してくれている人だと思うんです。だから、そういう人たちにも喜んでもらえる作品をつくりたい。難しいけど、共に歩む、という気持ちです。」やっと食べていけるめどがついたのは、このアトリエに移ってからのこの１年ほどだ。

彼は、実用的な器と、オブジェの両方を手掛けている。器は、最初「使いやすくて自分が出ているもの」を目指したが、不可能とわかって、使いやすさを切り捨てた。「でも、体が覚えているから使えるものができるんですよ。」いまの作品は、使いやすさ半分、自己表現半分だという。

鮮やかな色彩、愉快な形のオブジェは、「ことばにならないモワーッとしたもの」を表現したものだという。オブジェに限らないが、形になったものを後で見て、自分がその時何を考えていたか自己再発見するのだという。

「ものづくりは自由でなければならないと思います。自由にいろいろなものを吸収して、消化して表現すればいい。」「形なんて手で土をこねていれば誰にだってできる。大切なのは精神です。自分の精神性を形にうつすのだから。」

炉の音が止んだ。「見てきます。」と立ち上がる金さん。唯一の同居人である愛犬が後を追う。炉の中にあるのは、次に東京で開く個展のための作品だ。「いろいろな人に出会えて、ものづくりをやっていてよかった、と思います。」金さんが創作を続ける限り、川沿いの道をたどって、どんな遠くからでも、人々は彼に会いにやって来ることだろう。

（あ）

都市デザインセミナーが近づいてきた

丹下　健三　　２１世紀の都市と建築

フェリックス・ガタリ　　ノマド・都市・デザイン

クリストファー・アレグザンダー

２１世紀都市の全体性と生命――その創造プロセス――

梅原　　猛　　都市の表層と基層

名古屋市とＪＩＡ共催の都市デザインセミナーが、とうとう11月16日、17日と間近に迫ってきた。

この催しは、建築家が21世紀の都市像を世界にはじめて提起する画期的なものである。

建築家はいまや単体の建築をつくり、そこで完結することでは建築家の責務を負うことはできない。

周辺の都市環境への調和にとどまることなく、情熱を傾けて都市のあるべき姿、未来ビジョンを語ることが求められている。

クライアントは、そこに建築家の職能を認め、信頼をいや増すに違いない。

ガタリが何を語り、アレグザンダーが名古屋に何を提言し、梅原が市民の意識に何をもたらしてくれるか、興味は深い。

東京ではなく名古屋における開催である。いまや都市を語ることができなくなった東京ではなく、人間の呼吸を、息吹きを住民と住民との間に伝えあうことができる名古屋での開催である。

ＪＩＡ愛知部会の会員はこぞって参加していただきたい。11月16日、17日という歴史的イベントにぜひ参加してもらいたい。そして、そこで何が起こったか、何がはじまったか、家族に友人にクライアントに語り伝えてもらいたい。

都市デザインセミナーに参加したという歴史的興奮を大切にあなたの心の中に包んで醸成していただきたい。

都市デザインセミナーが予定する参加者は1000人である。

準備はすべて整ったが、動員だけが徹底的に遅れている。

いまは一にも動員、二にも動員である。

この都市デザインセミナーを盛況裡に成功させることの意義は大きい。

建築家の存在を社会に知らしめる何よりの機会である。個々に言葉をつくして「建築家プロフェション」を説明してもわかってくれなかったクライアントも、このセミナーを通して建築家を知り、建築家を認知するだろう。

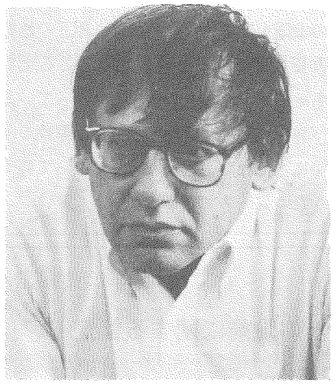
行政における認識も当然大きく変わってくるだろう。

この機会を通して、建築家とは何かという、大きな議論を巻き起こしてほしい。クライアントを誘って参加し、都市のあり様とともに議論していただきたい。

（編集部）

丹下健三（たんげ・けんぞう）
1913年愛媛県生まれ。東京大学工学部建築学科卒、同大学院修了。建築家であるとともに東京大学名誉教授、建設省建築審議会会長、丹下健三・都市・建築設計研究所代表を務める。新日本建築家協会初代会長。80年文化勲章受賞。主な作品に「広島平和記念会館」、「代々木国立競技場」、「東京カテドラル聖マリア大聖堂」、「新東京都庁舎」などがある。

フェリックス・ガタリ
1930年フランス生まれ。精神分析医学の泰斗であるジャック・ラカンに師事。フロイト分析学の批判を通じて現代文明社会における都市生活者の精神と肉体が、都市空間や都市施設といかなる対応関係を持って変容しているかを追究している現代フランス気鋭の精神分析学者。主な著書に『分子革命』、『精神分析と横断性』などがある。



クリストファー・アレグザンダー
1936年西ドイツ生まれ。ハーバード大学建築学部卒。カリフォルニア大学バークレー校環境デザイン学部教授。現代の都市・建築をさまざまな環境要素の集合体として解析するとともに、従来の固定化した都市計画の超克を提案し続ける世界的な都市学者であり、建築家。主な著書に『パタン・ランゲージ』、『オレゴン大学の実験』などがある。

梅原　猛（うめはら・たけし）
1925年宮城県生まれ、愛知県育ち。京都大学哲学科卒。国際日本文化研究センター所長。壮大な歴史観にもとづく日本文化研究で新たな文明論を構築するとともに、文学、宗教などの幅広い分野の論客として著名な哲学者。85年には、歌舞伎「ヤマトタケル」の脚本を手がけて話題となった。主な著書に『隠された十字架』、『水底の歌』、『日本の深層』などがある。

第１回連続プレセミナー

「現代都市の検証」

11月の「都市デザインセミナー」に向けてのプレ企画、連続プレセミナー「80年代の都市デザイン」が始まった。

第１回は、名古屋市中区の朝日ホールで、10月６日行われ、建築家、デザイナー、学生など約 240名が参加した。

この日の講師は、月尾嘉男・名古屋大学教授、フランス文学を専門とする宇野邦一・立教大学助教授、建築家の八束はじめ氏の３人。フェリックス・ガタリ氏の理論を紹介しながら現代の都市と建築について話を進め、「日本の都市は、つぎはぎ細工のパッチワークのようなところが欠点だと思われてきたが、最近、外国の建築家たちがその面白さに注目しはじめている。」「現代の日本には判断の基準がなくなっており、そこから、何をやってもよい、どうせやるなら目立つものを、という思想の欠如としての陽気なニヒリズムが生まれつつあるのではないか。」などと話し合った。

会場からはいくつかの質問も出て、関心の深さをうかがわせた。

第２回連続プレセミナー

「都市と環境のデザイン」

プレセミナー第２弾は、第１回と同じく朝日ホールで、10月13日行われた。午後１時からという時間帯であったにもかかわらず、第１回を上まわるほどの参加者が集まり、会場は熱気に包まれていた。

講師は、北原理雄・三重大学助教授、建築家の堀池秀人氏、そして三宅理一・芝浦工業大学助教授。北原氏を司会役に、ＵＣＬＡ客員教授でもある堀池氏がクリストファー・アレグザンダー氏のアメリカでの評価を、フランスの事情に詳しい三宅氏が、欧米と日本におけるガタリとデリダの影響の違いなどを中心に述べた。「アレグザンダーはカリスマ性を持った人物であり、人によって好き嫌いがはっきりと出る。アメリカでの一般的評価は、必ずしも高くはない。」「欧米では、デリダの思想が受けがよいが、日本では篠原一男伊東豊雄らによってガタリの思想がよく受け入れられている。」などの話に、会場から質問も出るなど、熱のこもった話し合いが続いた。

日・米の建築家が固い握手

ＪＩＡ全国大会で職能に関する協定の調印

新日本建築家協会とアメリカ建築家協会（ＡＩＡ）は、11月16日に開催されるＪＩＡ1989名古屋大会で「職能に関する協定」に調印、両国の建築職能の向上のために交流を深めていくこととなった。

さしあたっては、学生や若い建築家の相互受入といった友好を重ねていくなかで、相互の建築家教育を整合させるなどの段階を経て、将来的には、相互の建築家資格の基準を共通化するところまでもっていきたいという構想をもっている。

建設業が談合問題などで貿易摩擦の渦中にあるなか、建築設計界にとって爽やかなニュースである。

新日本建築家協会（JIA）と アメリカ建築家協会（AIA）との職能に関する協定

（序）

日本とアメリカ合衆国の建築家職能に属する建築家は、自ら高い水準の職能意識、誠実さ、及び能力の維持のために献身し、以ってそれぞれの国の社会及び文化の中で築き上げられた環境の発展に不可欠な、専門的な能力と、業務に対する真摯な姿勢とを社会に提供するものである。

（目的）

新日本建築家協会（ＪＩＡ）とアメリカ建築家協会（ＡＩＡ）は、それぞれの国における建築家職能に属する人々を会員として組織し、統合するという共通の目的を有する。即ち、職能における審美的、科学的、かつ実践的な効果を増進すること。建築の教育・訓練及び実務の水準を向上させることによって、建築の計画と建築物における科学と芸術の質を向上させること。より良い環境を通じて、人々の生活水準の向上を確保するため、建築産業と建築家の職能とを調整すること。そして職能が今後ますます社会に貢献することを目的とする。

（建築家職能の原則）

建築家職能の原則は、職能行為を規定した双方の職能団体内の倫理・行動規範及び関係法規によって確立される。

専門的能力：新日本建築家協会とアメリカ建築家協会の会員は、教育、研修及び経験を通じて発展させてきた理論体系を保有する。建築教育、実務経験（インターン制）及び資格試験のプロセス全体は、次のことを一般社会に保証するような構造をもつものである。つまり、建築家が職能的な業務を依頼された場合に、その建築家が当該業務を適切に遂行できる社会的に容認された水準にあることである。さらに、両職能協会の会員は、建築の芸術と科学に関する知識を継承、促進し、建築上の業績を尊重し、かつその発展に寄与する責任を負う。

自律性：建築家は、依頼主に対し私利を離れた専門家としての助言を行う。両職能協会の会員は、建築における芸術と科学とを追及するにあたり、職能人としての習熟したゆるがぬ判断が、他のいかなる動機よりも優先すべきであるという理想を堅持しなければならない。会員はまた、その職能に関する事項を規定する法律の精神と条文とを遵守する義務を有し、かつその職能人としての活動が社会と環境に与える影響について、慎重に考慮する責務を有する。

依頼主に対する義務：建築家は、依頼主のために行う業務に対しては、無私の献身をする。両職能協会の会員は、依頼主に対し、有能な職能人として奉仕し、かつ、依頼主に代わって、偏見のない公平な判断を下す責務を有する。

法的責任：両職能協会の会員は、依頼主に対して行ったいかなる行為及び職能的助言に対しても責任を持つ。会員は、ある業務の特定分野について意見を求められた場合、会員がコンサルタントとして雇った者も含め、教育・訓練または経験によって十分資格がある場合に限って、その職能的業務を提供することができる。

両協会は、公共の健康、安全、及び福祉のため、建築家の職能基準を制定し、維持する使命を有する。新日本建築家協会とアメリカ建築家協会は、かかる職能基準と規範とが下記の項目と特に関連するものであることにつき同意する。

- 建築教育と建築学校の資格認定
- 建築家と資格認定試験に必要な実務経験（インターン制）
- 建築家の免許のための資格認定試験の基準
- 建築業務上の行為を管理するに必要な倫理及び職能行為の基準
- 職能的能力の向上と継続的な教育のための基準

（結論）

新日本建築家協会とアメリカ建築家協会は、共同してこれらの職能にかかわる原則を支持し、建築実務における高水準の業務及び職能行為を維持する責任を持つ。両職能協会は、職能と専門的能力の基準とを互いに認めあうことが、公共の利益にかなうと同時に職能における利益ともなることに同意し、これらの目的に向け積極的に活動していくことを誓うものである。更に、職能に対して免許を与える場合、常に公共の健康、安全、及び福祉を守ることを唯一の根拠として考えることに同意する。

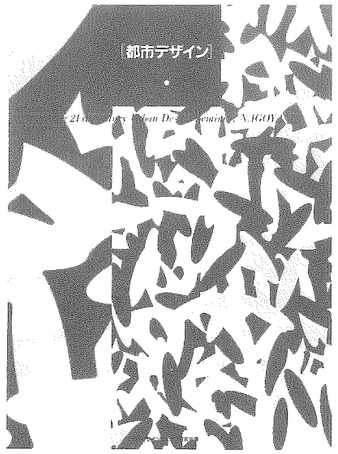
両国の設計及び建設における関係者の間には、公式、非公式の様々な連繋と結び付きとが存在することを認識する。新日本建築家協会とアメリカ建築家協会は、職能、技術、及びデザインに関する情報交換と相互関係の強化を図るため、職能問題についての合意に基づく協議事項を発展させることにより、この協定を通じてそれぞれの結びつきを深めていこうとするものである。職能問題についての協議事項には下記の事項が含まれる。

- 教育及び技術の交換を通じて、職能の推進を図ること。
- 個々の会員が両職能協会の委員会活動へ参加することを奨励し、以って技術及びデザインに関する情報の開発と交換とを強化すること。
- 学生、若手建築家、教師、及び実務家のための教育交換を通じ、職能及び文化に対する理解を改善していくこと。
- 展覧会の交換を通じ、建築に対する専門家及び国民の理解を改善していくこと。
- 公共の健康、安全及び福祉を保全するためと、職能上の免許資格を相互に通用させるために、職能及び専門的能力に関し実行可能な共通の基準を確立すること。

会長
北代禮一郎
社団法人　新日本建築家協会

会長
Benjamin E.Brewer Jr.,FAIA
アメリカ建築家協会

広報誌「都市デザイン」を発行



都市デザインセミナーにむけて、都市デザインセミナー運営会議は、このほど広報誌「都市デザイン」を発行した。

これは都市デザインセミナーの美しいポスターと同じ図柄を表紙に40頁からなるもので、都市デザインセミナーのスケジュール、講師の紹介のほかに、講師となるクリストファー・アレグザンダーの「まちづくりの新しい理論」、フェリックス・ガタリの「建築的言表行為」、梅原猛の「都市の表層と基層」などを記載している。

定価は 1,000円で都市デザインセミナーのＰＲに運用されることを事務局では望んでいる。

総合タイルメーカー
kamiyama

ヒューマニティがベースです。

kamiyamaのコーポレートマークは、人間と技術と企業と製品とが一体になって、力を合わせていく“和進(調和精神)”の象徴です。また拡がる未来への可能性と人の成長プロセスとに大切な環境要素として、コーポレートカラーをブルーに選定。次世紀への大いなる情熱をこのマークに込めてkamiyamaは歴史の重さと未来への新鮮な視点を融合させた、真に快適な《まちづくり》に推進してまいります。

上山製陶株式会社

本社工場　岐阜県多治見市上山町１丁目８番地　TEL〈0572〉大代表22-8111 〒507
FAX〈0572〉22-8119
名古屋営業所　名古屋市千種区今池２丁目１－33　TEL〈052〉731-0023・2152 〒464
FAX〈052〉731-7145

三高駅西地区再開発公募（高浜市）

三会で要望書を提出

建築の理解が一般に深まってきているというものの、相変わらず「建築文化」の無理解を示すような残念なことが起きている。

その一つは、高浜市で最近行われた「三高駅西地区第１種市街地再開発事業Ａ棟施設建築物建築計画公募」である。

三高駅は高浜市の表玄関であり、かねてから公共公益施設、住宅、商業、スポーツ施設などを中心とした再開発が検討されていた。

そこで高浜市は駅前施設の核となる1500㎡程度の商業施設と大小の多目的ホール、宿泊施設、物産展示場、ハイテクプラザ、図書館等の駅西立地の魅力を高める3500㎡程度の公益施設、および駐車施設を公開コンペで建設する方針を決め、建築団体に７月、協力を求めてきた。

ところが、公募要項を見ると、公開コンペにとって必要な要件を全く欠いているものであった。

コンペでは、まず何より公正・公開が求められるが、審査については「市の設置する『三高駅周辺開発推進委員会』と市議会『三高駅周辺再開発特別委員会』に諮り、最も優れたものを選定する。」とあるだけで審査員については、まったく触れていない。また「当選案の決定」についても「高浜市の表玄関としてふさわしい建築計画案を当選案として決定し、当該提案者を『三高駅西地区第１種市街地再開発事業』のＡ棟施設建築物建築設計及び監理の者として決定する。」とし、本来、公開コンペにともなうコンペ案の公表、審査経過の発表などについてはまったく触れていない。

しかも、「費用の負担」については「計画公募に関して応募者が必要とした費用は、すべて応募者の負担とする。」として当選者、入選者などの賞金は、一切考慮されていない。

それでいて応募者に求めるものは過大で、提案趣旨書、建築物利用計画書、建築物建築計画書、基本計画書、関係図書、建築設計、監理費用の内訳など各10部としている。その他、事業経歴書、営業案内書、過去３カ年の経営実績を示すものなど、およそ、公開コンペに関係のない書類の提出まで求めている。

これを見ただけで、主宰者の意図が感じられて応募者は尻込みしてしまう。

さらに公募期間は７月に発表、10月13日に締切るという急を要するもので、ここでも安易な公開コンペの立案が示されている。

そこで建築団体は急拠、愛知建築士会、愛知県建築士事務所協会、新日本建築家協会東海支部の三団体で対応について協議、別紙のような要望書をまとめ、提出した。

設計競技等にかかわる要望書

平成元年10月　日

愛知県　高浜市
市　長　　森　貞述様

㈳愛知建築士会
会　長　水野　洋生
㈳愛知県建築士事務所協会
会　長　近藤　一夫
㈳新日本建築家協会　東海支部
支部長　税田　公道

謹啓　時下益々ご清栄のことお慶び申し上げます。

日頃は私共上記三会に所属する会員が、御市公共建築物の設計に際して、何かとお世話を頂き有難く感謝申し上げます。

さて、過日「三高駅西地区第１種市街地再開発事業Ａ棟施設建築物建築計画公募要綱」なる文書を御市担当者が私共三会の事務局を訪問されてご持参の上、所属傘下の会員への周知方を依頼されました。

誠に丁重なご依頼と恐縮に存じております。

昨今、各地方公共団体が公共建築物を建築されるにあたり、設計競技等により建築設計者を選定することが多く見受けられますが、これは公平な立場で建築設計者を選任し、よりすぐれた建築を生み出すための方法として評価すべきことと考えます。

しかし、その実施の方法が適正を欠くとき、参加する建築設計者は過剰な負担を強いられ、或いは建築設計者と依頼者の間の信頼関係を損ない、結果として建築設計者の参加の意欲を低下させるばかりでなく、本来目的とする設計者の適正な選定に支障を来す恐れがあります。

したがって、建築設計者の選任にあたり、設計競技等「参加者に何等かの形で当該建築の設計に関する構想あるいは計画の提出を求めて比較考査し、適任者を選定する方法」を採用される場合には、少なくとも次の諸点につき適切に措置されることを要望いたします。

1．選考に際しては、あらかじめ審査員を明らかにすること。
（尚この場合、審査員の過半数は建築に関する専門家であることが原則と考えます）
2．審査の内容及び結果を必ず公表すること。
3．参加者の提出図書類に関しては、過重な負担をかけることのないこと。
4．提出書類の作成期間については、充分な期間をお取り頂きたいこと。

なお、ご参考までに、かつて建築設計に関わる諸団体が協議の上作成した、［「入札によらない建築設計者の選び方」より良い公共建築をつくるために］を資料として添付いたします。

また、設計競技等の実施にあたって必要な場合は、私共三会としても設計競技要綱の作成や審査員の選任等について、出来るかぎりご協力させていただく用意のあることを申し添えます。

以　上

「眉山ホール」取り壊しに

JIA東海支部・静岡部会が要望書を提出

平成元年９月　日

静　岡　精　華　学　園
理事長　竹田　昌平　様

社団法人　新日本建築家協会
東海支部　支部長　税田　公道
静岡部会　会　長　八木利喜爾

拝啓　貴学園ますますご清栄のことお慶び申し上げます。

日頃本会の活動と会員に対し、多大のご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

さてこの度、報道機関等により貴学園の「眉山ホール」取り壊し決定のニュースを知りました。今日まで私どもは、文化的価値の高い建築物が静岡市にあることに誇りと名誉を持ち続けて参りました。同時に高い次元で建築を見つめ、創造的建築物を完成至らしめたクライアントとしての貴学園の功績に対し敬意を払うものでした。

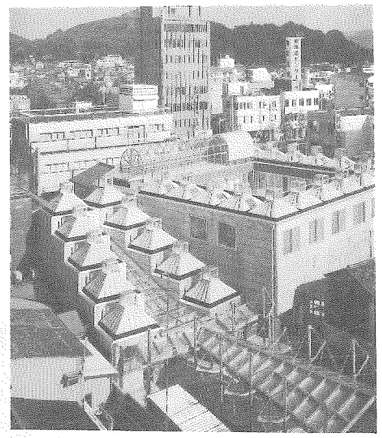
今回の取り壊し決定に対して、市民共有の新しい文化財的価値を持つ「眉山ホール」の意義をご再考願い、慎重な対処を頂きたくお願い申し上げる次第です。

こうした、ホールの文化的価値を訴える要望書に対し、学園側は、学園が生き残るために土地の再利用は必要、取り壊しは学校法人の機関決定であり、変更はできない、としている。

短大設立に学校経営の将来をかける学園側に、建築の文化的評価を求める声はなかなか届かないようだ。

築後５年で取り壊し

昭和60年度学会賞受賞作品



静岡精華学園（静岡市鷹匠町・竹田昌平理事長）の研修センター、眉山ホールは、同学園の創立80周年を記念、設計を学園卒業生の長谷川逸子氏に依頼し、昭和59年に完成した。住宅街という立地条件への配慮や、ピラミッド型の小屋根を多用した外観が高い評価を受け、昭和60年度の日本建築学会賞を受賞した。

同ホールの取り壊しは、８月末の理事会と評議会で正式に決まった。同学園では、1993年を目標に女子短大の開校を決めている。開校には約20億円が必要。建設資金の一部に充てるため、隣接する幼稚園の敷地を売却し、幼稚園を眉山ホールの敷地に移転することが決定された。

この結果、築後わずか５年の同ホールが取り壊されることとなった。

この決定に驚いた日本建築学会は、竹田理事長あてに、木下会長名で保存要望書を送った。これに続き、ＪＩＡ東海支部と静岡部会は、連名で要望書を９月下旬に同理事長あてに提出した。

要望書

静岡精華学園
理事長　竹田昌平様

1989年９月11日
長谷川逸子

静岡精華学園研修センター「眉山ホール」
取り壊し計画について

前略　静岡精華学園研修センター「眉山ホール」の取り壊しの計画を見直し、撤回することを強く懇願申し上げます。

この設計には、関係者や多方面からのご意見をうかがいながら設計に３年を費やし、心を込めてつくりました。学園の皆様たちだけではなく、ＰＴＡ、同窓生にもさまざまなご協力をいただきつくり上げました。完成後は、寄付金をいただいた同窓生の多くから精華のシンボルとして大切にしてゆきたいと報告され喜ばれてきました。結果的には関係者の心的な高まりを反映するかのような創造的なる建築として評価され、学会賞をいただき、社会的にも認められてきました。こうした経過や評価を共にした前理事長の引退後、新たな事業計画によりあまりに性急に取り壊すことは、教育の場所や文化を創造する場所としての学校という立場では慎重さに欠けることではないでしょうか。

将来の学園の発展のためにも、ぜひ、眉山ホールを残し短大を設立する方法を再検討していただきたく、強くお願い申し上げます。

かしこ

「女の館」設計競技に入選した女性たち――人と作品――

21世紀は女の時代!?

岐阜県では、「夢おこし事業」の一環として、全国の女性建築士を対象にした「女性がつくる21世紀のマイホーム“女の館”」設計競技を実施した。応募者、審査員を女性に限定した企画は全国はじめてということで、入選作が実際に建設されることとともに注目を集めた。全国から 193点の応募があり、5点が入選となった。

その表彰式と記念講演会が、10月6日、第32回建築士会全国大会の開催に合わせ、岐阜メモリアルセンターふれ愛ドームにて行われた。会場には 1,600人の聴衆が詰めかけ、2階まで満員の盛況だった。

表彰式風景

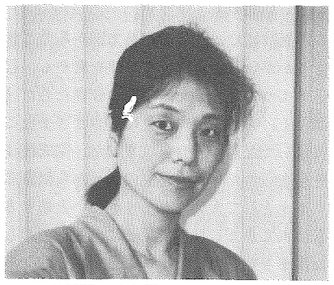
梶原拓岐阜県知事が、「女の館」をシリーズとして岐阜県が中心となって推進して行きたい等とあいさつで述べたあと、審査委員長・長谷川逸子氏の講演、女優小林千登勢氏の特別講演があった。

長谷川氏は、「女の館」設計競技について、日本の風土の中で自然のリズムを感じていたいという作品、高齢化社会に対応する作品、在宅勤務という新しい形態への提案が多く見られたと述べ、現代女性は、適応力に優れ、新しい体験に積極的であり、かつ生活の足下をしっかり見ている反面、ダイナミックさに欠けるところがある、将来はダイナミックな街づくりをして欲しい、と期待を語った。

今年は、建築士会全国大会アピールでも「『女性建築士』の積極参加」がうたわれ、21世紀に向けて女性へ期待が高まっている。今回入選した女性建築士たちも、その一端を担っているわけだ。

入選者のうち、東海地方在住の3名にスポットをあて、彼女たちのいま、そして未来を探ってみた。

「自然と共生する住まい」

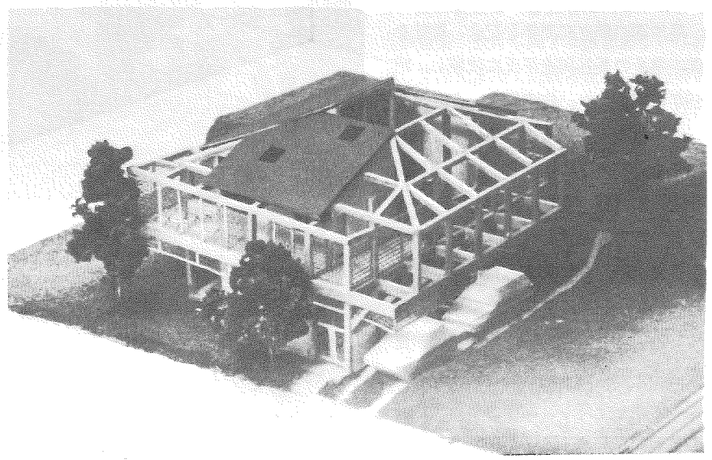

森本建築事務所主宰

森本　和子　三重県名張市

三重県名張市在住の森本和子さんは、大阪市生まれ。1968年に大阪市立大学生活科学部住居学科を卒業、渡辺建築事務所をへて、1974年に森本建築事務所を開設した。「花水木のある家」「ゲートをもつ町屋」「パティオのある写真家の住まい」などなど、主として住宅を手掛けている。

自然でさわやかな魅力の森本さん、彼女はどのような住宅づくりを目指しているのだろうか。

私は常々、その土地の風景を大切にしながら建物をつくっていきたいと考えています。



ところが最近、大阪のベッドタウンとして発展している私の住んでいる町にも、地域性を感じられない建物がどんどん建てられるようになり、この地独特の風景がなくなっていくのではないか心配です。

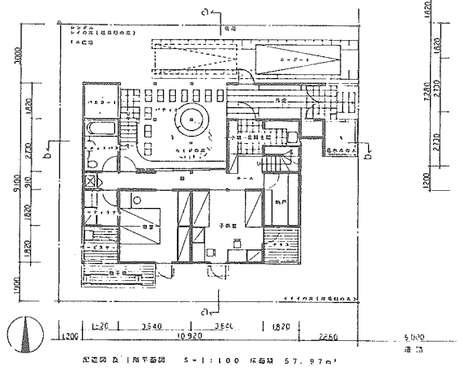
今回コンペに提案したのは、「自然と共生する住まい」です。自然と建物のかかわり方、ふれ合い方をテーマにしています。

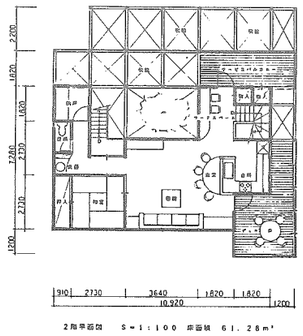
まず、建物の内に自然をとり込む形で、野原感覚のパティオがあります。

1階の個室は、それぞれ専用のデッキをもち、外部とつながっています。2階の斜め天井の広々とした居間はパティオとつながり、自然と接しています。

可動式スクリーンに囲われた2階のデッキは、半戸外で自然とのふれ合いがあります。

住みながら、四季の変化を感じることができる住まいの提案です。

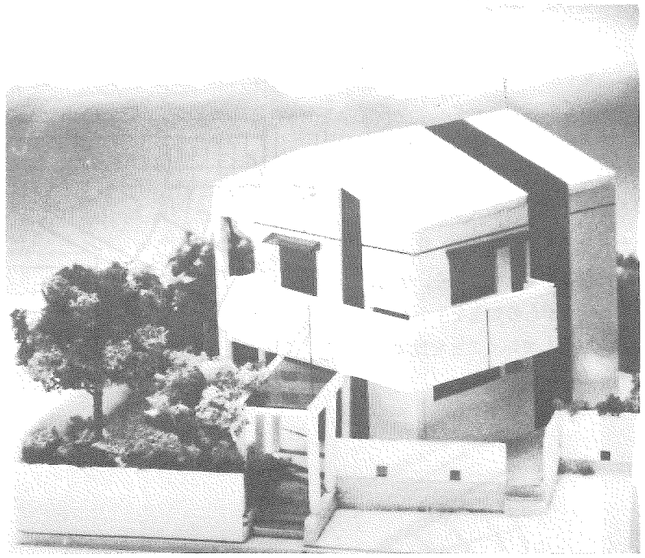


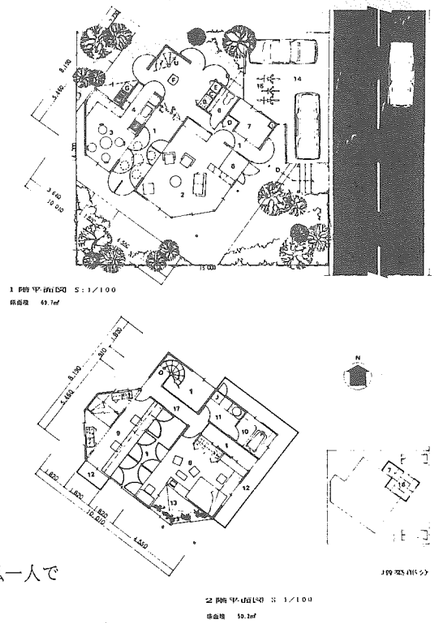


自然を建物の内にとり込んで、そこに住んでいる人がまるで自然の中で生活しているような気になる、そういう住まいをつくっていきたいと思います。

（森本　和子）

エアホール





設計工房　草主宰

金山　恵子　名古屋市名東区

「ガソリンスタンドがやってみたいなぁ、って前から思ってるんです。」くるくるとよく動く目、生き生きとした豊かな表情、熱を込めた喋り方……愛らしくてはつらつとしていて、小柄なせいもあって、34才というより24才みたい。

ご主人と2人で名古屋市東部、上社のマンションに住む。その一室が設計工房「草」の仕事部屋だ。所員は「私一人です。」

散歩が大好きで、本山までも平気で歩いてしまう。まだ広々とした空間の残る上社周辺は、そんな彼女にピッタリの環境だ。最近は、環状2号線やビル群の進出で、様子が変わりつつあるけれど。

名古屋に来たのは、中部工業大学工学部建築学科に入学したため。出身は淡路島だ。卒業後、いくつかの事務所を転々とし、自分で事務所を始めたのが3年ほど前。「草」という名にしたのはまだ去年のことだ。

「コンペは一度やってみたいと思ってたんです。」という彼女。今回は、実際に建つということにやりがいと魅力を感じ、初めての応募となった。いま実際に手掛けている仕事も住宅と小型店舗。マンションなどには興味がないとのこと。

仕事の上では、お客さんに助言をし、導いていくのが自分の役割と心得ている。「自分の意見ももちろん持っていますか、強く出しすぎて押しつけになってはいけないんですよね。」話し合いを重ね、相手の意向を生かすアドバイスをしていく。

将来やってみたいのは、「ガソリンスタンドとスーパーマーケット」。「実際に頼まれないから、夢がふくらんで、一生に一度でいいからやりたい、と思うんです。ガソリンスタンドは、えっ、これが？　と驚かれるような、ユニークなものをつくってみたい。スーパーは、買い物がしやすく、コーヒースタンドなど憩いのスペースもあり、レジを出たあと駐車場までワゴンを押して行けるような便利なものを思い描いています。」この話になると、ひときわ語り口に熱がこもって、目が輝いてくる。

製図用の机と、入口の「草」と書かれてたプレートは、ご主人の作品だそうだ。マンションの中とはいえ、実に居心地のよさそうな住まい兼仕事場であった。

HOME WORKS AND BUSINESS IN HOUSE

吉柳　満アトリエ

川口亜稀子　名古屋市天白区

このコンペに応募した動機は、「女性対象のコンペ」というのが面白かったから、そして、女性が生き生きとした生き方のできる住まいをずっと考えていたので、それを表現する場になると思ったから。

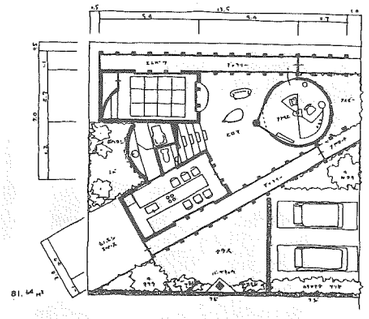
川口亜稀子さんは大阪府生まれ。大阪工業専門学校を1983年に卒業し、その後３年間、大阪の北村陸夫＋ＺＯＯＭ計画工房で働いた。名古屋へ来たのは、吉柳満アトリエに入りたくて。彼女は、九州など各地にある吉柳氏の作品を熱心に見て回り、吉柳氏のもとで仕事がしたい、と思うようになったのだ。この熱意と行動力。

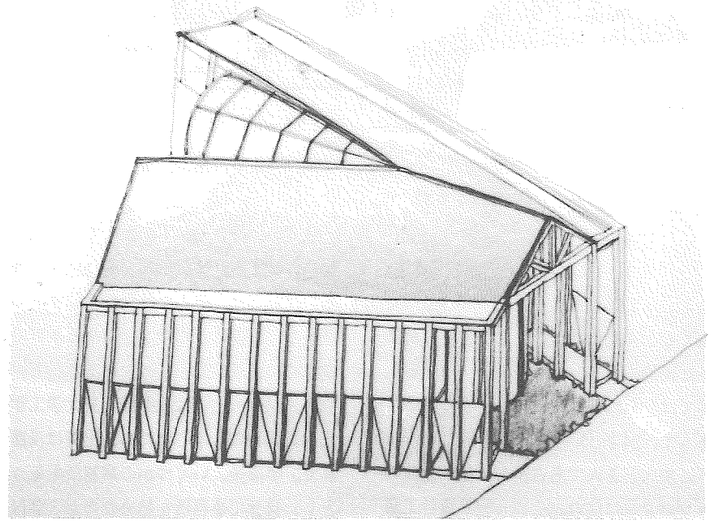
いまの職場は「きびしいですね。でも、吉柳さんの考えの根底を流れるものに共感できますから。」とのこと。仕事は住宅が中心。設計をするときはいつも、いままでの基本を押さえた上で、コミュニケーションができる場を設けるとか、その人の個性を生かすといった、住まい方の新しい提案をするようにしている。

さらに今後は、「建築家」としての目だけでなく、自然から生まれ出てくるものを見る目を養いたいとのこと。新しい設備と、精神的なゆとりとしての自然が調和した住まい、自然の力をうまくとり入れて生かすことのできる住まいを考えている。

「在宅勤務といったこれからの生活をイメージしてつくられた若々しい案」と評価された今回の入選作品でも、快適さを空調などに依存するだけでなく、縁側、障子といった昔ながらの知恵を生かし、自然の表現を共有していくことを提案している。

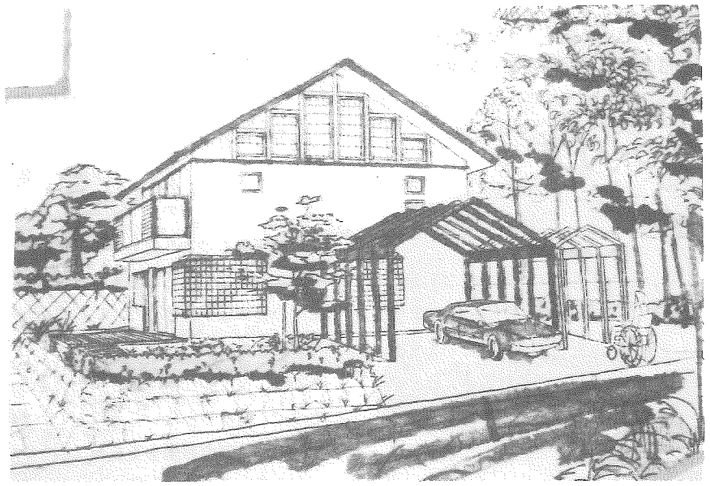
「仕事の技術が身につくまでは、名古屋にいることになると思います。でも後々は、大阪に帰りたいですね。」という川口さん。黒い帽子がカッコイイ、おしゃれな女性である。

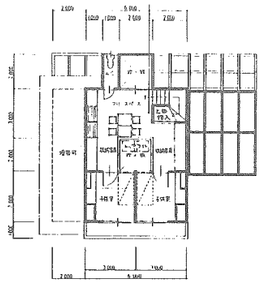


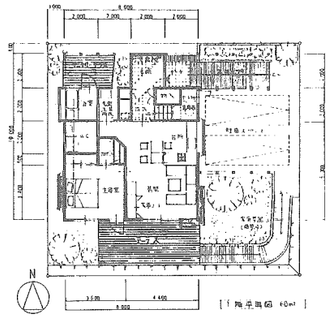


住む人いろいろ……

吉田紗栄子　東京都練馬区
共同者
恒吉よし子　千葉県鎌ケ谷市

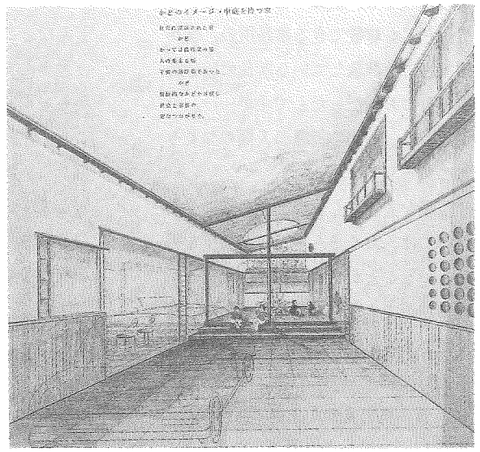


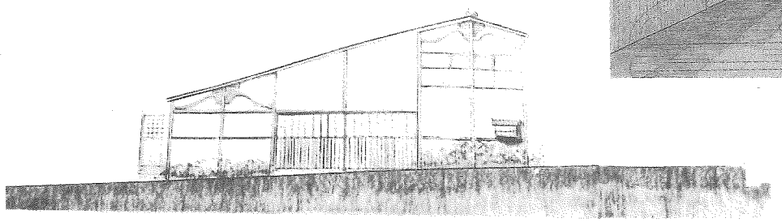




かどのイメージ・中庭を持つ家

多田　雅　大阪市中央区





なぜ私はＪＩＡに参加しないか

建築家の職能を社会の中に定着させることを目標として、ＪＩＡは会員の拡大に努めてきた。今秋には、アメリカ建築家協会（ＡＩＡ）とも職能に関する協定を結び、今後より一層の組織の充実と発展が望まれる。だが、会員数の伸びは今ひとつ。

内部の人間だけで頭を悩ませているよりも、入らない当の本人にその理由を訪ねてみたらどうだろう。気付かなかった問題点が浮かび上がってくるかもしれない。

“ＡＲＣＨＩＴＥＣＴ”では、何人かの非会員に、入会しない理由をざっくばらんに語ってもらおうと考えている。第１回は、岐阜市の長田雅弘さんにインタビューを試みた。

問題は組織の人間のつくり方

㈱環境計画主宰　長田　雅弘

ぼくのところには、いちばん最初に、岬設計事務所の田辺尚美先生から、ＪＩＡに入らないかという誘いがあったんです。岬設計事務所というのは、岐阜の設計事務所の中で、いままでいちばんしっかりと仕事をしてこられて、今日自分たちが岐阜で設計ができるようになった、恩人のような事務所なんですよ。作品的にいっても、その姿勢からいっても、組織のあり方からいってもとても尊敬できる事務所の、僕が個人的にも尊敬している所長の田辺先生からのお話だったんですが……。

問題は、内部の組織の人間のつくり方にあるんです。

組織を大きくしてひとつの力にするためには、たくさんの設計事務所を募るということがあるけれど、僕はどんな事務所でも数さえ集まればいい、なんていう考え方は間違っていると思う。数だけでは絶対力になりませんよ。逆に、質の良いものが少数でも集まれば、変化を引き起こす原動力になります。中国の天安門事件だって、中国全体からすれば、ほんの一握りの学生たちから始まったことでしょう。

その組織に入っているということが、信頼できるということの証となるようでなければならないと思います。僕は、一緒に仕事をする以上は、自分の尊敬できない人が入っているような組織には入りたくありません。というより入ってはいけない、と思っています。クライアントに「環境計画さんは、いつもあんなに立派そうなことを言っているけれど、なんだ、あんな事務所の人と同じ組織に入ってるのか。」なんて思われたら、人格を疑われますよ。自分を貶めたくはないですね。

では、尊敬できる事務所というのはどんなところか。僕は３つ条件があると思うんです。まず第一に、建築作品がちゃんとしたレベルに到達していること。建築事務所なんだから当然です。第二に、建築家としての姿勢がちゃんとしていること。バックマージンを取ったりするのは論外です。第三に、事務所の組織がちゃんとしていること。つまり、所員に仕事に見合うだけの給料を払っている、ということです。僕は、食うや食わずのアトリエ事務所の芸術家気取りのようなものには反対です。人間らしい生活がちゃんと送れるだけの金は稼がなければ、いい建築なんてできるはずがありませんよ。その点では、役所の仕事は設計料が安過ぎるので、僕はやらないことにしています。それなりの報酬を支払わないということは、その仕事を認めていないということになるんです。これでは、建築家の職能を認めさせることもできるはずがありません。

以上３点がそろってはじめて、尊敬できるのです。

僕は、職能の確立などＪＩＡの目指していることには賛成です。ですが、ＪＩＡがこの３点を守っていない、尊敬できない事務所の人々をも会員として入会させている限り、僕はＪＩＡには入りません。　（談　文責・編集部）

第32回建築士会全国大会、岐阜で開催

「未来につたえよう自然と文化・匠わざ」をテーマに10月５、６日に岐阜市で開かれた大会には、一日目の研究集会1,000人、二日目の大会式典には 4,500人と、いずれも全国から過去最高数の建築士が集う盛況ぶりだった。

三分科会の今年のテーマは、「21世紀の生活環境と建築」――住民派のまちづくり、生活派の建築創造を！、――「周辺環境と対話する設計手法」――周本環境に適合した建築づくりとは――、「多様化する社会のニーズと建築士の職域」――社会のニーズに応えられる建築士とは！――、で、全国から集められたケーをもとに、長時間にわたり、活発な発表が行われた。

２日目には、今年岐阜県が行った「女性がつくる21世紀のマイホーム“女の館”」コンペの表彰式と、長谷川逸子、小林千登勢の講演会も行われ、女性建築士に対する大きな期待もうかがわれた。

製品紹介

さびないステンレス水槽新発売

㈱鈴木製作所

耐海水鋼ＳＵＳ３２９Ｊ２Ｌ製ステンレス水槽

特長

①さびない
耐食性に優れ極度の悪環境にも耐えられます。

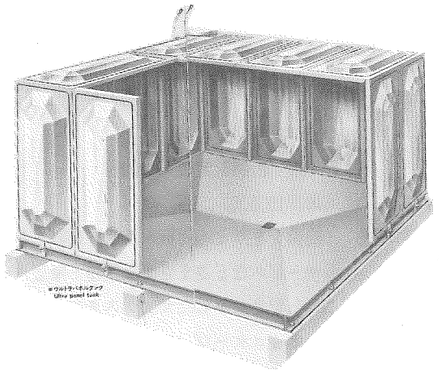
②メンテナンスが容易
内部補強レスのため保守点検を容易かつ安全に行うことができます。

③美しい
ステンレス独自の光沢に加え水圧を支えるダイヤカットデザインがあらゆる建物にマッチします。

④安い
高価な材料ですがプレス加工により材料のロスを除いた合理的な設計によりＦＲＰ複合板パネルタンクとほとんど同価格です。

（用途）
受水槽　高置水槽
蓄熱槽（保温付）
工業用水槽
消化用水槽
各種薬品タンク

わが社は第一種圧力容器の認可工場として42年間にわたりステンレス製タンクを製造してきました。その実績とノウハウの蓄積をベースにＳＵＳ４４４製パネルタンク、貯湯槽、密閉式膨張タンク、ＳＵＳ３２９Ｊ２Ｌ製パネルタンク等、次々と新製品を生みだしております。



照会先：株式会社鈴木製作所
℡　0586-62-1201
担当　営業部　柴田信一郎

シンコール㈱

やさしさは、アートする。

21世紀へ向かう今日、さまざまな謎が、ひとつひとつ解き明かされている……。でも私達が、一番知りたいのは、自分自身の感性ではないのでしょうか。そんなことを教えてくれる居住空間があれば、素晴らしいことかもしれませんね……。その為にシンコールは、一人一人の個性を引き出せるような空間を創り出す為にアートな壁装材の開発を行っています。先進だからこそ、やさしさが大切なのです。

美しさには、繊細な力。

あの古代エジプトから現代に、神秘な美しさを伝えるピラミッドーそれには、大きな力の存在がありました。しかし、大きな力の存在とは、細部を型どる繊細な力の集合にほかなりません。現代空間における床の存在もインテリアの全てをささえる大切な役割りをはたしています。だからこそ高品質に支えられた素材・色彩・性能を徹底して追求した床材が不可欠となります。シンコールの床材は、かけがえのない家族、大切な友人を繊細な力で新しい時代の美しい暮らしへと誘います。

イマージュがほほえむ風景のある部屋。

風景を部屋一杯に呼吸して、はじける自然を趣いてみる……、今までになかったここちよさが広がって、しばし自分との旅に出てみる……。いながらにして、旅ができるというのは、ステキですね。シンコールはカーテンを、もっと自由度の高いやわらかな壁、機能美あふれる窓、と考えています。ハイクオリティ、ハイセンスでより高い防音、断熱効果を得ることのできるカーテンが、自由な旅をお約束します。さあ、思い切り、窓をあけて下さい。時にはシンフォニックに……。

ライフステージに、新しい喝采。

コンサートといえば、まずチューニング。オーケストラは、色々な楽器の組み合わせで美しいハーモニーを奏でます……。でも、その楽器ひとつひとつが、正しくチューニングされていなければ、やさしいメロディは伝わってきません……。家具も、その目的に合ったチューニングとそれを生かす色彩が大切です。シンコールは、トータルでインテリアを考え、目的に合ったお部屋をコーディネイト。ライフスタイルは、あくまでも美しく楽しく、ときめいてほしいのです。さあ、ライフステージの第一幕の開演のベルが今……。

照会先：シンコール㈱開発商事部
℡　052-203-8820　FAX 052-203-8870

新刊案内

ガウディのパルク・グエル
E・アルバラン著　寿里順平訳
A５版　P.218 定価2,300円
（本体2233）　東洋書店
　アントニ・ガウディの生涯と作品について現今評価されていることに対し新解釈をした。

木造住宅の防音リフォームマニュアル
日本住宅リフォームセンター編
B５版　P.142 定価2,580円
（本体2505）　彰国社
　夏を旨として作られる木造の住まい。私室内でもヘッドホーンが必要な昨今、本書は騒音の防止について詳しく解説。また、リフォームにも十分対応できるよう……図解にて紹介。

流動化コンクリート施工指針・同解説
日本建築学会編
B５版　P.180 定価2,781円
（本体2700）
　昭和54年「流動化コンクリートの技術の現状」から施工指針の確立に向け検討され、今回改訂２版となり刊行。

ショップデザイニング
グラフィック社編
A４版　P.215 定価10,300円
（本体10,000）
　商業をとりまく物販・飲食・余暇・各種サービスなどさまざまな業種・業態。これらをリンクしたサブシスタンスな環境コミュニケーション。生活環境は第３の皮膚感覚でありデザインの重要性をとく書籍。

インテリア・スペース・デザイニング
近藤康夫著
A４版　P.154 定価2,990円
（本体2903）　グラフィック社
　多様性とは裏腹に実は収縮していくインテリアデザインの領域を拡大させる原動力として方法論を解説。図版入り。バイリンガル方式で。

博物館・美術館
西日本工高建築連盟編
A４版　P.68　定価1,442円
（本体1400）　彰国社
　シリーズの１冊。実施図面を転載し設計計画から各部の設計、実例と流れる。実務家・研究者向き。

（丸善調べ）

編集後記

●都市デザインセミナー、ＪＩＡ全国大会が、今月16日、17日と迫ってきました。事務局はこれにむけて大童のようです。「ＡＲＣＨＩＴＥＣＴ」も創刊１年を経過しましたが、なかなか新しい方針も出されることなく滞ったままになっています。

●「デザイン」という言葉は、この地域の住民には、かなり浸透したようです。名古屋の街も変わりました。名古屋駅前ひとつ見ても大きな様変わりです。駅前のモニュメント、ライトアップされた紫の大名古屋ビルヂング、外装を変えた名鉄百貨店、他の大都市の駅前にくらべて遜色のないファッショナブルな街となりました。

●そうすると醜いものがよく目立つようになります。大名古屋ビルヂングの球形の「森永」の広告塔、名古屋駅の「リンナイ」「コカコーラ」の広告。市民の目にも好ましくないものとして映るようです。デザイン意識の向上ということはこういうことのようです。

●東大曽根の商店街もモダンな商店街に一変しました。思わぬいん賑を極め、再開発のソロバンは十分あったようです。

●若い人には、ああいう町が好かれるのかも知れませんが、私にはどうも異和感だけが残りました。東大曽根にあった人間臭さを見事に一掃してしまったのが何よりの不満です。建築家の再開発の感覚は、モダンにすること、つまり相変わらずアメリカ、ヨーロッパを真似ることであって、人間の精神的な部分、歴史のもつ匂いを、どうも掃除することのように思えてなりません。本などではそうではないと多くの建築家は語っていますが、やることは共通して脱歴史であり、脱伝統であり、人間臭さからの離脱のようです。

●来る都市デザインセミナーにおいては市民と共有できる都市未来像を提起していただきたいと願うものです。

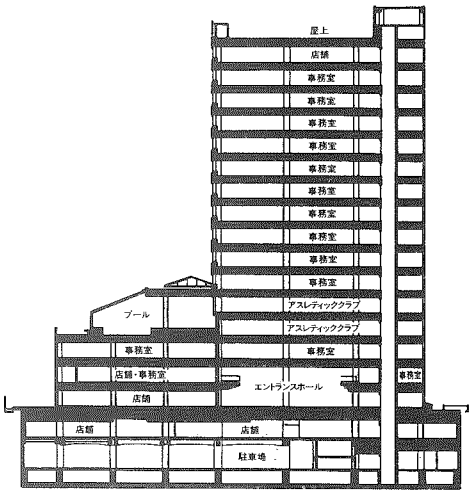
ARCHITECT
第14号
発　行　日　1989·11·1（毎月１回発行）
定　　価　３８０円
発　行　所　社団法人 新日本建築家協会
東海支部愛知部会
発行責任者　栢本良三
編集責任者　森　鉦一
編　　集　愛知部会ブリテン委員会
建築ジャーナル
名古屋市中区栄四丁目３番26号
昭和ビル５階
TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

●REPORT 2

MITSUBISHI

ＪＢＰオーバル向け三菱インテリジェント　ビルシステム

断面図



ＪＢＰオーバルの外観

所在地	東京都渋谷区神宮前5丁目52番2号
建築主	日本ビルプロヂェクト㈱、㈱日本リース
設計監理	日本ビルプロヂェクト㈱、㈱北澤建築設計事務所
施工	東急建設㈱、鹿島建設㈱、東海興業㈱、鉄建建設㈱、日東建設㈱JV
電気工事	㈱雄電社、㈱関電工、六興電気工事㈱JV
規模	地下2階、地上16階、塔屋1階
構造	地下部分/鉄骨鉄筋コンクリート造 地上部分/鉄骨造/タイル打込PCカーテンウォール
用途	事務所、店舗、アスレチッククラブ
敷地面積	4,702㎡
建築面積	1,945㎡
延床面積	29,295㎡
竣工日	昭和63年11月

ＪＢＰオーバル

東京・青山の青山通り沿いに、本格的なインテリジェントビルＪＢＰオーバルが昭和63年10月誕生しました。このビルは美しいだ円形をしたビルで周囲の注目を集めています。また、周りには全面鏡面ガラス張りの“国立総合児童センター（こどもの城，青山劇場）”やキリスト像を抱いた“青山学院大学校舎”が建ち、さらにピラミッド形をした“国連大学”の建設が予定されており、まさに青山のこの一帯は、独特な建物が建ち並び、インテリジェントビルとしての建築面、外環境面も十分なものとなっています。ビルの環境面では、外には前面広場、１階吹抜けイベントホールにはふんだんに植栽が施され、人々の憩いの場となっています。

このＪＢＰオーバルを支えるシステムは、①分散処理型ビル管理システム（ＭＥＬＢＡＳ－Ｄ）②デジタル電子交換機（ＭＥＬＳＴＡＲ）③キーレスセキュリティシステム④総合課金システム⑤駐車場システム⑥ＩＴＶシステム⑦インテリジェントエレベーター⑧出退勤システム（テナント工事）と多岐にわたり、さらにそれらを統合化し、高度な機能を発揮させています。また、運営・管理の面でも設備の異常を菱電サービス㈱が、警備の異常を綜合警備保障㈱が24時間オンラインで監視、万一の時の出動サービスを備え、また、多機能カードの発行・管理、電話システムのコンサルティング等インテリジェントビルの運営をトータルに支えています。

ビルが知能をもちはじめた
Mibass マ・イ・ハ・ス
(Mitsubishi Intelligent Building Automation Systems & Services)
●お問い合せ：三菱電機株式会社 中部支社 ビルシステム部☎(052)565-3166